

入選

ピンク色の気もち

徳島県 沖洲小学校 2年 近藤 画十

「ありがとう。」

と友だちが言った。ぼくは心ぞうがドキドキしていた。そして、とてもうれしくなった。

その日のひる休み、ぼくはなかのいい友だち 15 人くらいといっしょに、うんどう場でおにごっこをしていた。そのとき、ちがうクラスの友だちが、

「ぼくも入れて。」

と言ってきた。クラスはちがうけれど、ときどき話したりいっしょにあそんだりしている子だった。おにごっこをしていた中のなんんかか、

「もうおにもきまっとるけん、あかん。」

「ぼくらのグループだけであそぶけん、いや。」

と言った。ぼくは、どうしようかなとまよった。みんなとちがうことを言ったら、自分もなかまはずれになるかな。でもあとから来た子も友だちだしな。ぼくはしばらくになにも言えずに考えていた。そしてゆう気を出して、

「入れてあげよう。」

「おにはもう 1 回きめなおしたらいいんでー。」

と言った。ぼくはみんながなんてこたえるか、ふあんだった。もしかしたら、

「そんなこと言うなら、自分もいっしょにあそぶのやめたら。」

と言われるんじゃないかと思ってこわかった。でもまわりの友だちは、

「たしかにそうやなー。」

「じゃあ入れてあげようか。」

と言って、その子をなかまに入れてくれた。ぼくは、ほっとした。さっきまでのふあんな気持ちがなくなって、あたたかい気もちになった。心の中の、はい色のモヤモヤした気もちが、一気にぽかぽかしたピンク色になったような気がした。

ぼくは、小学校に入ってから、心にきめていることがある。それは、友だちにできるだけしんせつにするということだ。しんせつにしたら、自分もしんせつがかえってくるからだ。そして、みんなでしんせつをかえしあえば、みんながえがおになれると思う。

あのとき、友だちはぼくに「ありがとう」と言って、とてもうれしそうな顔でわらっていた。きっと「ぼくも入れて」と、大ぜいのグループに話しかけるのは、ゆう気がいったんじゃないかなと思う。もしことわられたら、かなしい気もちになったかもしれない。だから、ぼくも思い切ってみんなに自分の気もちを言うことにした。

すごくドキドキしたけれど、ゆう気を出してよかった。それからその友だちと前よりもっともつとなかよくなれたし、なんだか新しいきずなができたような気がしてうれしかった。これからはずっと、あのときのぽかぽかのピンク色の気もちをわすれずにもちつづけたいなあと思う。